

第3部 論考

第1章 出土陶磁器からみたクラン・コー遺跡とロンヴェーク遺跡

奈良文化財研究所企画調整部 佐藤由似

1. はじめに

従来のカンボジア考古学はアンコール期や先史時代にその対象が集中し、ポスト・アンコール期は等閑視されていた。ポスト・アンコール期はアンコール王朝が終焉した1431年からフランスによる植民地統治時代が始まる1863年年までの約430年間を指す。この430年間という時間は、長らく闇に包まれたままであった。近年になり、奈良文化財研究所を中心として当該期に関する考古学的調査が端緒についたばかりである（奈良文化財研究所2008）。今回、ポスト・アンコール期の王都ロンヴェークと墓葬が発見されたクラン・コー遺跡に関する調査がおこなわれたことにより、多くの出土遺物を検出することができた。出土遺物は、当該期カンボジアを語る上で重要な役割を持つ。本稿では、両遺跡出土の出土遺物の中でも陶磁器を中心に振り返り、その特徴と意義について論じたい。

2. クラン・コー遺跡出土陶磁器

第1章で報告の通り、クラン・コー遺跡の発掘調査では墓壇2基を良好な状態で検出することができたと同時に、まとまった量の遺物を一括性が高い状態で確認した重要な事例であるといえる。副葬品のうち輸入陶磁器に関しては、シーサッチャナライ青磁、中国青磁、青花を検出した。また、表採遺物からはさらに多様な陶磁器類を確認した。数多くの明青花、シーサッチャナライ青磁、ビンディン青磁、ミャンマー青磁、クメール黒褐釉陶器、在地土器などが検出され、一部徳化窯系白磁合子などがみられた。これら出土遺物のうち青花は小野分類碗B群C群を中心とし、おおよそ15世紀から16世紀初頭に位置づけられ、その他の東南アジア産陶磁器も、同様の年代が与えられる（表1）。当該期は1431年にアンコール王朝が崩壊したのち王都が転々とし、国内の政情も不安定な時代に差し掛かる時期にあたる。このような時期に、今回出土したような陶磁器を入手し得た勢力がクラン・コー地域に存在したことを示唆することができよう。

3. ロンヴェーク遺跡出土陶磁器

ロンヴェークでおこなった調査では東西2km、南北2.5km、総面積約500haにおよぶロンヴェーク全体をくまなく踏査することはなしえなかった。しかし、あくまで現段階での判断となるが、ロンヴェークの南側を中心に豊富な量の遺物を表採することができたといえる（第1図）。とりわけ南辺土塁周辺に多く分布していたようである。南辺土塁東端部周辺（第2図）とプレア・アン・テープ周辺では明青花を中心に輸入陶磁器の分布密度が濃い状況であったと言える。加えて、プレア・アン・テープにほど近いマウンドの周辺からは、鉄滓状の遺物を数点表採した（第3図）。当地点で鉄生産をおこなっていたかどうかについては今後の調査が必要であるが、ポスト・アンコール期における金属生産の実態把握への第一歩となる可能性を秘めている。

王都ロンヴェーク出土陶磁器は、上述のクラン・コー遺跡出土陶磁器より1段階下った年代が与えられる。ロンヴェークで検出された陶磁器はその6割が中国青花である。とりわけ小野分類碗E群、F群、同分類皿C群にあたる明代後期、16世紀後葉から17世紀前葉に特徴づけられるものが多い。景德鎮産青花碗がその大半を占め、団龍文碗、饅頭心型花卉文碗などのほか、五彩青花や緑地青花なども小片ながら確認することができた。『王朝年代記』によるとロンヴェークは1529年から1594年まで存続していたといわれる。ロンヴェークで確認された出土遺物の中心はまさに16世紀後葉から17世紀前葉となり（表2）、年代記とほぼ大差ない年代観を与えることができる。ただし、ロンヴェークでは17世紀後葉以降の遺物も全体の4割ほどを占めることから、現段階で『王朝年代記』に記載された史実をそのまま反映しているとは言えない。むしろ、17世紀後半、王都が7kmほど南のウドンに遷ったのちも、何らかの形でロンヴェークは利用されていた可能性を考えるべきであろう。

4. 陶磁器の流通

クラン・コー遺跡からは15世紀から16世紀前葉にかけての明青花と多様な東南アジア産陶磁器を確認した。

一方、王都ロンヴェークからは16世紀後葉から17世紀前葉の明青花を中心に18世紀代に至るまでの中国青花多く検出した。

クラン・コー遺跡出土景德鎮青花、シーサッチャナライ青磁、ミャンマー青磁、ビンディン青磁などの15世紀中葉から16世紀前葉の資料に関しては、カンボジア国内での検出事例は残念ながら少ない。しかしながら、東南アジア海域で発見された沈没船資料、たとえばコー・サムイ沖やサンタ・クルス沖資料に共通性の高い陶磁器が確認できる(Brown 2009)。当該期はタイ・ミャンマー・ベトナムで生産された陶磁器が積極的に海外輸出され始める時代にあたる。クラン・コー遺跡出土の東南アジア産陶磁器がどのようなルートでもたらされたのかは、今後さらなる調査が必要であるが、おそらく海上・陸路・河川を駆使してもたらされたものを想定される。たとえばタイ・ミャンマー陶磁器はシャム湾を渡り、カンボジア側へ陸揚げされた可能性と、いわゆる東西回廊など陸路を最大限利用してカンボジアまでもたらされた可能性が想定される。また、ビンディン青磁も陸路を利用して当地域までもたらされた場合と、中国青花などととも貿易船に積載されてカンボジアにもたらされた可能性もありうる。いずれにしても、当該期の流通経路の更なる検討には他地域での同時代遺跡に関する調査成果の蓄積が必要である。

一方、ロンヴェーク出土陶磁器の約6割は中国青花であると述べた。これはロンヴェークがトンレサップ川西岸に面し、貿易にも有利な土地に位置していることが少なからず影響しているとみられる。17世紀のポルトガル人宣教師ガスパール・ダ・クルスも河川を遡上し、カンボジアへ上陸したということから(ガスパール 1987)、貿易船も河川ルート、メコン川からトンレサップ川を遡上し、プノンペンを経てロンヴェーク周辺まで到達したと想定することが可能である。

17世紀オランダ人の描いた絵地図(第4図)には(Muller 1917)、Eavweck という表題が付けられ、当時の王都ロンヴェークやウドンと思われる王都とトンレサップ川沿いに建ち並ぶ家屋、そしてこれらを結び、山並みの向こう側へ続く陸路が描かれている。おそらく当時の政治・交易に欠かせないものが描かれていると考えられるともいえるだろう。今回の調査では、当時の王都やその周辺の遺構、ならびに陶磁器を具体的に考察することにより、当該期の社会・経済活動の一端をわずかながら明らかにすることができたのではないだろうか。本調査を端緒として、今後も当該期カンボジアの様相を実証的に探るべく、王都ロンヴェークやクラン・コー遺跡周辺での調査をさらに続けていく必要があるだろう。

参考文献

小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No.2』P.71-88、1982

ガスパール・ダ・クルス、日埜博司訳 『十六世紀華南事物誌』明石書店、1987

奈良文化財研究所 『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』、2008

Brown, Roxana. The Ming Gap and Shipwreck Ceramics in Southeast Asia, Towards a Chronology of Thai Trade Ware. Bangkok. The Siam Society under Royal Patronage, Bangkok, 2009

Muller, Hendrik P.N. De Oost-Indische Compagnie in Cambodja en Laos: 'S-Gravenhage, 1917

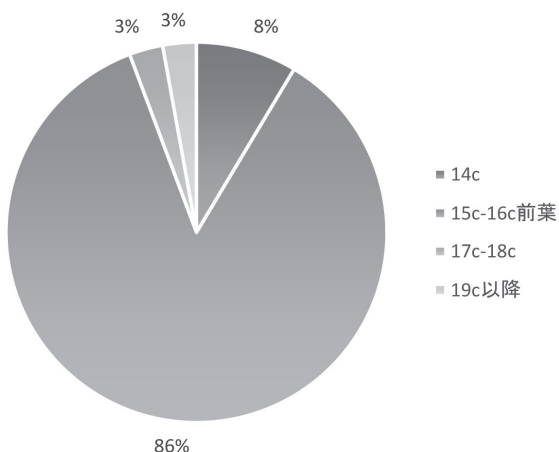


表1 クラン・コー出土遺物年代組成

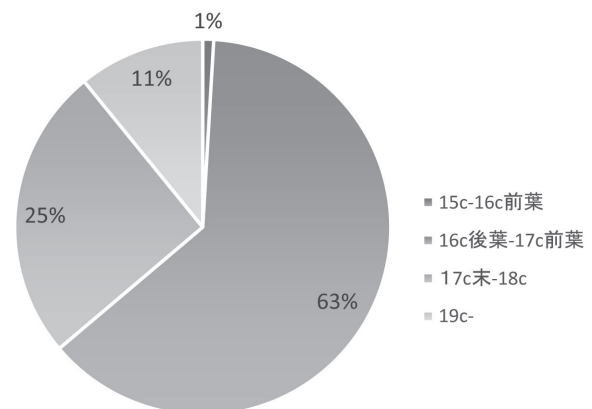
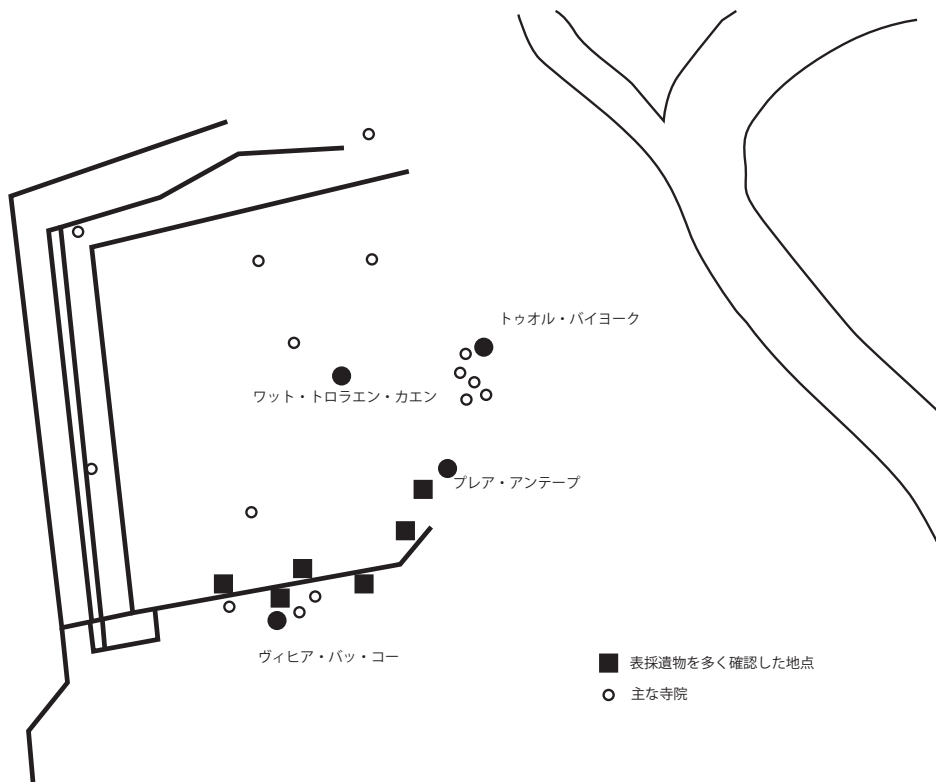


表2 ロンヴェーク出土遺物年代組成



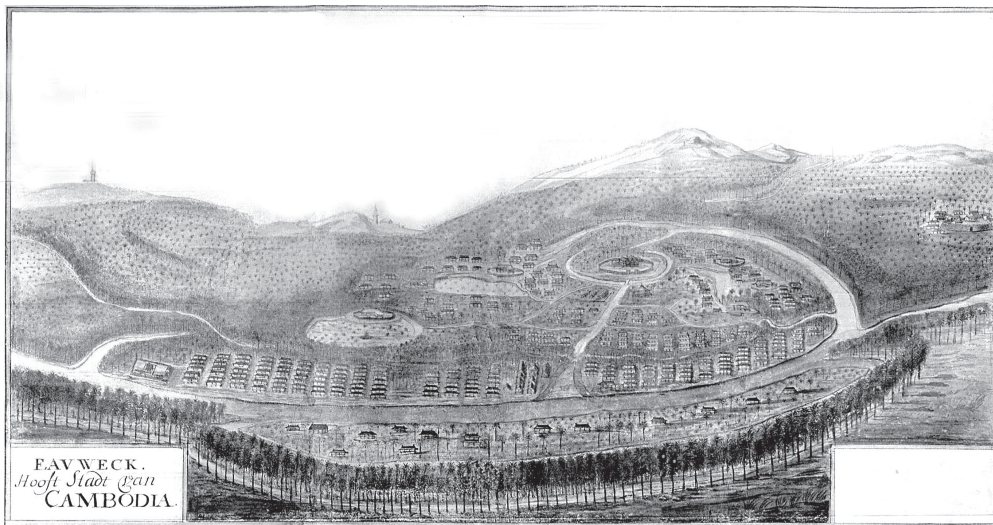
第1図 ロンヴェーク模式図



第2図 ロンヴェーク南東隅表採遺物



第3図 プレア・アン・テープ周辺採集鉄滓状遺物



第4図 ロンヴェーク周辺絵地図 (Muller1917)